ディー語映画の立場からいえば、制作本数はタミル語映画やテルグ語映画に後れは取っていても、ヒンディー語話者の人口や社会的影響力の大きさや広がりを考えると、ヒンディー語映画の扱いが不十分であるように感じられるかもしれない。おりしも、ヒンディー語映画に造詣が深い松岡環氏が、2011 年刊行の『南アジアの文化と社会を読み解く』（鈴木正崇編、慶應義塾大学東アジア研究所）の中で、インド映画についての論考をまとめている。連続市民講座での講演が基になっているという性格上、概説的な記述が主となってはいるが、近年のインド映画の変化についても部分的にではあるが述べられている。今後さらに、ヒンディー語映画を専門とする立場からも、インド映画産業の劇的な変化についての詳細な研究が出されることが期待される。また、テルグ語映画やベンガル語映画など、その他の言語の映画に焦点を置いた同様の研究書が出ることがあれば、さらにインド映画の研究に深みが生まれることになるであろう。

評者も数年前にムンバイーとチェンナイで、映画プロデューサーや、映画監督、配給業者など、映画関係者へのインタビュー調査を行なった。そこでは、本書でも言及されている「企業化」（corporatization）という語に代表される現代のインド映画産業の大きな変化の側面として、（1）資金調達の手段の正規化、（2）映画ビジネスに関わる知識や技術の伝授方法の体系化への志向、（3）テレビドラマの女性層への普及に伴う若者を対象とした映画の出現などがみられることを明らかにすることができた。

本書の著者も述べているとおり、映画はその国の文化や社会を如実に反映するものである。インド映画を新たな角度から描いた本書が、今後の日本でのインド映画研究の充実につながることを切に願うばかりである。

澁谷利雄『スリランカ現代誌―揺れる紛争、融和する暮らしと文化』（東京：彩流社、2010 年、334 頁、3,000 円＋税、ISBN: 978-4-7791-1526-4）

（評）荒井　悦代*

筆者の澁谷氏のようにスリランカの宗教や文化について論じることは、私にはできない、と早々に白状しなければならない。しかし、後書きを読み、著者がコロンボ近郊のボラレスガムワに住んでいたことを知った。私も 2008 年 9 月～ 10 年 3 月までボラレスガムワに住んでいたのだ。この場所は日本人が住む場所として全くメジャーではないのに。さらに私のすまいの最寄りのバス停留所

*　日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研究センター動向分析研究グループ長代理

・2012、「スリランカ―進むインフラ開発、緩慢な和解プロセス」、『アジア動向年報 2012』、アジア経済研究所、523–546 頁。
・2011、「スリランカ―マヒンダ・ラージャパクセ大統領 2 期目始動」、『アジア動向年報 2011』、アジア経済研究所、501–524 頁。

の名前は筆者が愛して止まない「アンバラマ」ジャンクションだった。もう取り壊されてしまっていたのか、残念ながらアンバラマはなくなっていたが。偶然にしても、なにかの巡り合わせだろう、ということで力不足を認識したうえで、自分の経験と合わせつつ「スリランカ現代誌－揺れる紛争、融和する暮らしと文化」を紹介する。

本著は、著者のこれまでの著作を集めたものである。したがってソカリ劇の話などは著者の既刊本[1] に詳しいかたちで収録されている。写真もそちらの方が数も多くカラーもあり、楽しめる。しかし本著では、副題にあるように、スリランカにおいて人々の暮らしや文化が融和しようとしている様子が強調されている。

スリランカの人々の中に融和の兆候が見られるということは、評者のように民族紛争まっただ中のスリランカをフィールドとして仕事をし始め、内戦のないスリランカを知らなかった人間にとって、明るい光と受け止められた。

筆者がスリランカの人々、自然、文化・芸能をこよなく愛しておられるのがよく分かる。だから、内戦が始まり、どうしても紛争にも目を向けざるを得なかったことは筆者にとって苦痛だったかもしれない。苦痛を感じながらも、民族紛争の思想的な背景について芸能や大衆文化の側面からも説明してくれたのは有り難い。

民族紛争の根源について、一般的にはどうしても政治や経済の面からアプローチしがちである。つまり、大学の入学枠とか公務員の職などの希少な資源をシンハラとタミルで奪い合っているのだ、というような。奪った・奪われたという感覚や、差別されているという感覚が、こっち側とあっち側という対立を生むのだろうな、と頭では理解できた。

しかし、内戦時の様子や内戦終了後の現状を見るとそれほど単純でないと思わざるを得なかった。なぜならコロンボではシンハラ人もタミル人も、ムスリムも普通に暮らしていたから。見た目には区別はできないし、シンハラ人がムスリムの店で買い物することもタミル人の店で食事することも普通だった。憎み合っていたらそんなことはできないだろう。希少な資源の奪い合いだけに目を奪われていると、解決策を模索するにも選択肢が限られてくる。

本著ではシンハラ・ナショナリズムの担い手が、エリートや新興のシンハラ中産階級から中下層階級に移ったこと、そして近年では前者が融和を求めるのに対して後者がより過激な民族主義的な方向性を示すことを、歌や映画の移り変わり、信仰のあり方を観察することで説明している。

歌や芸能という身近なところでどのように人々の意識が形成されていったのか、どんな風に共有されていったのか、それをどのように経験していったのかが描かれている。歌は頭に残る。元気づけてくれることもある。みんなで歌うと仲間意識も生まれる。そうやって普通の人々がシンハラ民族主義に駆られていったのが想像できた。

内戦のほかにも民族解放戦線（JVP）の問題も、学術論文では立ち入れない部分が多くある。なぜシンハラ人同士で殺し合いをしなければならなかったのか。そして、首謀した政党がどうして 10 年

もせずに中央政府に第三位の議席を得るほど支持を得ることができるのか。私は、実はしっくりする解が得られないまま、統一国民党とスリランカ自由党という二大政党への不信感の裏返しだと説明してきた。それも間違いではないだろうが、より決定的にスリランカの人々を突き動かす何かがあるはずであると思い続けてきた。だからその時期を背景にした小説なども読んでみた[2)]。それらの小説は、等身大の人々の悩みや生活を示してくれた。それらはその時代が共有する流れも示してくれたが、あくまでも小説なので限定的な体験であり過ぎたかもしれない。本著や著者の「祭りと社会変動」は、シンハラ青年を突き動かした、鬱々とした感情が累積し、それが爆発して行く様が説明されている。

JVP の武装闘争後、人々が救済を求めるためにサイババ信仰が活発になったことは興味深い。やはり無理があったのだ。「良き仏教徒として再生する」ためにサイババのような力が必要だったのだ[3)]。JVP が支持されている背景と同時に、人々が不安感を抱いていること、何とかしたいと感じていることについても手がかりがつかめたような気がする。端から見ると、どうして内戦下で平常生活を送れるのだろうと常々疑問だったのだ。人々はそうやって現実と心のバランスをとろうとしていたのかもしれない。

そして、仏教徒がヒンドゥー教的な信仰を受け入れること、仏教寺院でヒンドゥー的儀礼を開催することを矛盾なく受け入れる僧侶らを描くことで、内戦が宗教対立でないことを納得させてくれる。

著者は、個人の救済にとどまらず、サイババ信仰が民族間の融和への欲求の表れでありシンハラ・ナショナリズム変容の特徴、と見えるという。今後の和平・和解の可能性として期待したい。その一方で政治家はシンハラ・ナショナリズムを強調する。政治家は演説で、腕をぐるぐる振り回しながら絶叫する。力強い。そして力強い演説が演説上手として評価される傾向にある。ナショナリズムは、国民を統合する力を持っていただろうが、それによって引き裂かれているようにも見える時もある。

―スリランカ人の心象風景―

都市部と農村部では、生活様式が異なるだけでなく、好みや思考にも影響し断絶が生じていることにも本著は触れている。第 11 章「スリランカ映画小史」では、ふるさとや伝統と都会的な生活や行動様式との違いや世代間の意識の違いから生じる苦悩を描いたマーティン・ウィクラマシンハ原作の小説を映画化した、レスター・ジェームス・ピーリスの作品についても紹介している[4)]。

マスメディアや交通機関の発達によって都市部と農村部の格差は通常なら縮小してゆくはずだが、内戦後のスリランカでは、コロンボの発展は目覚ましく、おしゃれなショッピングモールができている一方で、農村部には立派な道路ができているものの、大きな変化はなさそうである。おそらく農村部から見るとコロンボは別世界のように見えることだろう。そのため、全国から学生の集まる大学では、都市部の学生と農村部の学生の間でうまくコミュニケーションがとれずに関係がぎこち

なくなってしまうと言う[5)]。

その一方で都会の学生も田舎の学生も意識を共有するものがある。本著でも述べられている、仏教復興運動を主導したアナガリーカ・ダルマパーラによって作り上げられた3つのテーゼ（仏法の島、ライオンの島、アーリヤ人種）のほかに、目に見える形でスリランカ人が共有する心象3点セットがある。

私がスリジャヤワルダナプラ大学の50周年祭に居合わせた時である。実行委員だった知り合いの学部長が張り切って、企業などから寄付金を集め、学生に予算を託し思いっきりやってみろと言うことになった。学生らも努力して、各学科の学習内容に合わせたすばらしい展示が目白押しとなった。歴史学科の学生たちはスリランカの歴史絵巻をジオラマで作ったり、化学学部の学生は、化学マジックを披露するなど見事なものだった。そこで気がついたのは、村の風景のジオラマの多さであった。寺と水田と貯水池の三点セットなのだ。昔の王様は権力者であると同時に仏教を守り、貯水池を建設・管理し、米の生産を増やして国土を豊かにすることに心を砕いていたと信じられている。学園祭のテーマは決まっていなくても、晴れがましい場所では自然と、皆が共有する風景を作ろうと言うことになったのだろう。圧倒的に村出身の生徒が多いそうなので、都会の学生さんもそれに従ったのかもしれない。ジオラマに現れる風景は、平和そのものだった。当時はまだ内戦中だったが、平和のあるべき姿として、若い学生たちがこのような風景を共有しているのかもしれない、それは好ましいのではないか、と思った[6)]。

スリランカは、時と場所によって様々な様相を見せる。人々の意識や行動様式も都市と農村の違いだけでなく、階層や、時代、世代などによって異なってくる。本著は、評者がスリランカの人々と交わる中で生じてきた様々な疑問を解くための手がかりを提示してくれた。

註

1)　『祭りと社会変動－スリランカの儀礼劇と民族紛争』同文館。インターネットで検索すれば動画も見られる。

2)　マイケル・オンダーチェ、小川高義（訳）『アニルの亡霊』新潮社、エディリヴィーラ・サラッチャンドラ、中村禮子（訳）『明日はそんなに暗くない』南雲堂など。

3)　2011年、コロンボの中心部に、大川隆法氏の看板を見かけた。本屋でも関連出版物が平積みになっていた。心のよりどころを求める人々に受け入れられているのだろうか。

4)　本著で紹介されているのは小説の三部作のうちの映画化された第一部である。第一部と二部は日本語訳が出ているので原作に触れることができる。確かに映画化するとどんなに優れた俳優や演出によっても、原作の機微は薄れてしまうだろう。それほど書き込まれた作品である。第三部の日本語訳が待たれる。野口忠司氏による訳はすばらしい。原作の風味を損ねていない。

5)　学生間の融和が必要という名目で、入学前に軍キャンプでオリエンテーションが開催されることになった。

6)　筆者も指摘するように、現大統領は，偉大な指導者ドゥトゥゲムヌ王の逸話を利用しようとしている。これも人々の歴史認識や心象風景に訴えようとしていると思われる。